

P2-003

医療的ケアが必要な障がい児および養育者支援に関わる多職種が捉える養育者の困りごと

宮崎 つた子、上杉 佑也、井倉 一政、中北 裕子

三重県立看護大学 看護学部

【目的】

在宅で生活する医療的ケアが必要な障がい児（以下、医療的ケア児）が増加する中、養育者への支援は充分ではない現状にあり、養育者は負担や困難感といった感情を抱いている。養育者への効果的な支援を検討するため、養育者に関わる多職種が養育者の困りごとをどのように捉えているかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

A県内の医療的ケア児の支援を行っている医療・福祉・教育施設の看護師、リハビリテーション関連職種（以下リハビリ職）、福祉職、特別支援学校教員（以下教員）等265名を対象に、平成30年8月～平成31年1月に無記名の選択式一部記述式の自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、先行研究で行った医療的ケア児の母親の捉える困りごとに関する質的研究結果を基に作成した。分析は、項目ごとに記述統計と多重比較を行った。倫理的配慮として、B大学倫理審査会の承認を得て実施し、研究目的・方法、秘密保持、結果の公表および質問紙の回収をもって同意とする旨を書面で説明した。

【結果・考察】

回答者は、142名（53.6%）であった。回答者の背景は、40歳代が51名（35.9%）で最も多く、主な職種は看護職44名（31.0%）、リハビリ職40名（28.2%）、教員39名（27.5%）で、医療的ケア児への支援に従事した年数は1～5年が89名（62.7%）で最も多かった。主な職種で回答の違いを比較した結果、「家族に関して困っていること」の項目の内、「両親への申し訳なさ」で、「思う・やや思う」と回答した割合は、看護職（29.5%）、リハビリ職（15.0%）、教員（5.1%）で、看護職やリハビリ職は教員よりも有意に高かった。同じく、「きょうだいへの申し訳なさ」看護職（65.9%）、リハビリ職（52.5%）、教員（25.6%）、「家族間の調整」看護職（84.1%）、リハビリ職（67.5%）、教員（48.7%）で、看護職やリハビリ職は教員よりも有意に高かった。その他の「医療的ケア児に関して困っていること」、「養育者の負担に関して困っていること」、「社会資源・教育に関して困っていること」の項目では主な職種の回答に差はなかった。結果から、医療的ケア児および養育者支援に関わる多職種が捉える養育者の困りごとの一部で、各専門職の専門性の違いによる偏りや認識されにくい側面があると思われる。各専門職のケアの狭間をなくしていくためにも、各専門職の相互理解や多職種のネットワークの連携を充実させていくことが重要である。

P2-004

医療的ケアを必要とする子どもの理解にむけた支援者研修会 ー学校管理者、看護師、保護者の講演を通してー

佐々木 俊子、矢野 芳美、永谷 智恵

名寄市立大学 保健福祉学部 看護学科

【目的】

医療的ケアを必要とする子どもが、地元の学校に通学するために必要な支援について理解を深めることを目的に研修会を開催した。その実際と結果について報告する。

【方法】

日時：平成30年11月対象：A市及び近郊の教育・医療・福祉施設に案内状を送付し研修会を周知した。研修内容：学校管理者から学校の支援体制、看護師から学校での役割と支援の実際、保護者の学校生活への思い、各45分の講演を行った。アンケート調査：調査内容は、講演の内容について「大変良かった」「良かった」「どちらでもない」「良くなかった」の4段階評価、及び意見・感想の記述とした。アンケートは当日の参加者に配布し記入後、会場出口に設けた投函箱にて回収した。

【結果】

参加者は、教育関係14名、医療福祉関係20名、高校生4名、大学生94名、その他3名、合計135名であった。講演内容は、学校管理として学校の設備面と教員や多職種の協力体制が必要であること、看護師は教育の場であることを優先し医療的ケアを実施すること、保護者は周りの子ども達に受け入れられ一緒に育っている安堵や嬉しさ、そして多くの専門職者に支えられている思いなどであった。アンケートの回収は123名、回収率91.1%であった。講演内容は、「大変良かった」71.5%、「良かった」28.5%であった。意見・感想は68件の記述を得た。記述の意味内容から「講演内容について」「医療的ケアが必要な子どもの学校生活を理解」「今後の研修会への展望」に分類しまとめた。「講演内容について」は、医療的ケアを受けながら学校に通えることや学校に看護師がいることは知らなかった、保護者の子どもの成長や学校生活への思いを知ったなど41件。「医療的ケアが必要な子どもの学校生活を理解」は、インクルーシブ教育や合理的配慮の重要性を再考した、専門職者のチームワークで子どもに最高の体験を提供できるといったなど13件。「今後の研修会への展望」は、他の地域のことも広く市民に伝えてほしい、支援が必要な子ども達のことをもっと聞きたいなど14件であった。

【考察】

参加者は、医療的ケアを必要とする子どもが地元の学校に通学でき学校生活を送るには、教育、医療、福祉関係者など専門職者の連携により子どもが育つ教育環境を提供できると実感していた。今回の研修会は、医療的ケアを必要とする子どもと保護者の思いに寄り添った支援の理解に繋がったと考える。